

特集号「2008年岩手・宮城内陸地震」の発刊にあたって

2008年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震は、岩手県南部を震源とするM=7.2の内陸直下型地震です。この地震による岩手・宮城両県での死者行方不明者は合わせて23名となっています。この地震は、火山帯山地で発生した震源の浅い(8km)マグニチュード7級の内陸直下地震であり、断層直上の強い地震動と山地の沢部に面する斜面崩壊に代表される斜面地盤災害が多く発生したことが大きな特徴となっています。K-NETの一関西で観測された地表強震動の最大加速度は、3成分合成で4Gを越え、我が国観測史上最大となりました。地表での観測地震動の最大加速度の持つ意味を再考する機会が与えられたように思います。また、震動によって発生した沢部の斜面崩壊は、天然ダムを形成し、2次災害への対応策についての課題を顕在化させました。地震によって発生した土石流は、1984年長野県西部地震以来、24年振りのものとなりました。

本特集号は、この地震における学術的知見を論文としてまとめるとともに、関連の研究論文を広く募集して、内陸山地における地震災害の特徴を理解するために企画されたものです。内容としては、この地震の地震動、地殻変動、地盤災害、構造物災害に関する9編の論文と報告が、厳正な査読審査を経て掲載される運びとなりました。なお、本特集号は、2011年3月11日の東北太平洋沖地震の少し前に企画された関係で、東日本大震災への対応のため、いくつかの投稿予定の論文が掲載に至りませんでした。発災から3年が経過して、現地は復旧が進み、栗駒山(1627m)への登山客も戻ってきました。日本地震工学会会員におきましては、栗駒山の自然に触れながら、復旧の様子を見ていただく機会を作っていただきたいと思います。

最後に、特集号を企画した委員一同より、執筆者、査読者、および日本地震工学会論文集編集委員会、高橋徹委員長はじめ多くの方々のご尽力に厚くお礼を申し上げます。

2011年11月8日

特集号「2008年岩手・宮城内陸地震」編集委員会

風間基樹(委員長)、中村 晋、片岡俊一